

◇本書の王系譜

弥生史の礎となった常識や通説を歴史的観点から一つ一つ検証していくと、戦前から信じて疑うことのなかった皇統万世一系も、戦後の学校教育の場で、「百余国を束ねる王朝など存在しなかった」と教えられてきたことも誤りと気づくはずで、邪馬台国史の全貌がとんと解明できない原因は、ここににあります。一から考え直して、再構築する以外にありません。

大陸の古い歴史を背負ってきた渡来人たちが築きあげる上古の歴史は、魂の再来・古の善政再現・孫子の「戦わずして勝つ」の実現に挑戦した歴史でもありました。それらが織り重なって流転する様子は「三国志」をはるかに凌駕して、世界中に誇れる歴史だったので、記紀系譜は、神武—崇神—応神とあるべきところに、神武—崇神の間に大倭王八代（大日本王八代、綏靖（開化）を挟み、崇神—応神の間に垂仁・景行・成務・仲哀の邪馬台国「オロチの敵之国王朝、天（敵）国王朝、日本王朝」の王四代を割り込ませて、万世一系に改ざんされてしまいました。

本書の王系譜は、これを本来の姿に正したもので、国宝に指定された海部氏系図と合致します。

これに沿って事跡を並べ替えると、一世紀前半に始まる倭国王朝すなわち天地の誕生秘話、大乱前後の状況、女王ヒミコの生涯、大和朝廷誕生の経緯がくつきりと浮かび上がってきます。

金印の「委奴（倭奴）国王」→倭国王朝初代の国常立（初代天神天常立の入婿）

倭国大乱→伊奘諾期の一八〇年代中頃に勃発した天下分け目の戦い。畿内の邪馬台国が勝利

日神の天照大御神→倭国嫡流の姫君。のちに、高千穂宮から大倭に遷座してヒミコに転身

狗奴国男王卑弥弓呼→熊襲の地に天降った天孫火瓊瓊杵

景行・仲哀の熊襲征伐／神武東征→畿内の日本王朝と熊襲の日前・和王朝の覇権争い

大和朝廷→神武（磐余彦）が三世紀末に日本朝を討ち、三〇一（辛酉）年元旦に樹立

【海部氏系図本系図】

始祖彦火明 — ○ — ○ — 三世孫倭宿禰 (珍彦) — 武振熊

【同勘注系図、『旧事紀』尾張氏系譜】 始祖彦火明 — 児天香語山 — 孫天村雲 — 天忍人 (亦名倭宿禰)

【合成系図】

饒速日 (天孫、先代旧事本紀の饒速日) ※ …… 養子

天火明 (天孫) — 火火出見 — ○ — 倭宿禰 (珍彦) — 武振熊 (神功の将軍)

火明饒速日 — 天香語山 (高倉下) — 天村雲 — 天忍人 (倭宿禰)

日神 — 忍穗耳 — 火瓊瓊杵 (天孫) — 火照 (海幸彦、火明、火明饒速日)

神功

火火出見 — う草葺 — 磐余彦 (神武)

【本書の王系譜1】

【倭奴国嫡流】

豊受皇太神 (天照大神)

神武・崇神 ↓ ハツクニシラス天皇

伊奘諾

190年代

220年代

250年頃

301年大和朝廷樹立

天之尾羽張

日神

火瓊瓊杵

火火出見

神武

崇神

心神

【邪馬台国】 倭女王

1ヒミコ

2トコ

3倭迹迹日百襲姫

5倭 (迹迹) 姫

(天神) 天照大神・天鹿兎山 / 垂仁 (饒速日 / 天火明 / 火明饒速日)

(倭王) 景行 …… 成務 / 仲哀 ……

(八道の都督、道主)

【大日本】

綏靖 — ○ — ○ — ○ — ○ — 孝靈 — 孝元 — 開化 — 崇神

神代

前660年頃

四世紀

【記紀】 日神の天照大御神

火瓊瓊杵 …… 火火出見

神武

綏靖 / 開化 — 崇神

垂仁 — 景行 — 成務 — 仲哀

心神

磐余彦

(大日本王八代)

(邪馬台国の倭王)

神功

「大日本の系譜」

綏靖 — ○ — ○ — ○ — ○ — 孝靈 — 孝元 — 開化 — 崇神

大足彦 (天火明の兄、彦太忍信襲名)
倭姫 (天火明の兄、五代女王)
彦太忍信 (若年死)

「邪馬台国の系譜」

月神、高皇產靈

熊野櫛御氣野、豊受皇太神

天照大神

天鹿兒山

豊受姫、栲幡千千姫

倭女王

1 ヒミコ

2 トヨ || 豊鍬入姫

3 倭迹迹日百襲姫

5 倭姫

神功 ↓ 磐余彦妃に転身

(忍穗耳)

火瓊瓊杵

三代垂仁 (火明饒速日)

景行 (彦太忍信)

日本武

二代垂仁 (天火明)

武内宿禰

初代垂仁 (饒速日)

2 トヨ || 豊鍬入姫

4 神功

向津姫

日神の天照大御神

「倭奴国嫡流の系譜」

大倭豊秋津島の姫

高皇產靈の養女

天火明 (天孫に移籍、天鹿兒山の兄)

火照 (火明、海幸彦) ↓ 火明饒速日

宗像三皇女 (田心姫・市杵嶋姫・湍津姫) ↓ 素戔嗚の養女

熊野クス日 (五皇子の一人、五十猛、天日槍) ↓ 素戔嗚の養女

天照大神の養子

忍穗耳

饒速日 (天孫に移籍、天鹿兒山の兄)

火折 ↓ 二代垂仁の兄・誉津別となる

万幡豊秋津姫

火瓊瓊杵

火スセリ ↓ 海幸彦襲名

栲幡千千姫を襲名

木花開耶姫

火火出見 (山幸彦)

【記紀】

倭奴国嫡流 (高天 ↓ 日前 ↓ 和) の系譜

大日本の系譜

邪馬台国の系譜

日神 — 忍穗耳 — 火瓊瓊杵 — 火火出見 — ○ — 磐余彦 — 大日本王八代 — 崇神 — 垂仁 — 景行 — 成務 — 仲哀 — 応神

【本書の王系譜2】

日子宿間（若年死）
彦狭嶋（日子宿間襲名）

ウヅ彦（紀伊・宇佐・倭国造の祖、椎根津彦）
影姫

大足彦（景行）
大足彦が彦太忍信・家主忍男武雄心を襲名

竹内宿禰 — 襲津彦 — 磐之媛

孝霊

孝元

倭迹迹日百襲姫（倭迹迹姫、三代女王）

開化

崇神

稚武彦

稻日大郎姫

日本武

「吾は、大足彦天皇の子なり」
「形は我（景行）が子、実は神人にます」
「仰ぎて君が容を視れば、人倫に秀れたまえり。若し神か、
「吾は、現人神（天照国照彦火明饒速日）の子なり」

三代垂仁（火明饒速日）

二代垂仁（天火明）

初代垂仁（饒速日）

景行（大足彦）

影姫

ウジ彦

竹内宿禰

襲津彦 — 磐之媛

天照大神 — 天鹿兎山

日神

火瓊瓊杵 …… 火火出見

成務…仲哀

四代女王神功

八幡

心神 — 仁徳

宇美誕生の皇子↓新羅王

【記紀】

孝霊

稚武彦

景行（大足彦）

崇神

日本武

成務

神功

仲哀

心神

仁徳

磐余彦 — 綏靖

孝元

彦太忍信

日本武

武内宿禰

襲津彦

磐之媛

心神

仁徳

仁徳

- ①記紀では、崇神は孝元の孫。日本武は景行と稲日太郎姫の児で、垂仁・稚武彦の孫。稚武彦は孝元の弟で、稲日太郎姫の父。本書は、景行が彦太忍信や家主忍男武雄心を襲名し、竹内宿禰をこしらえたと見るから、孝元・垂仁・稚武彦は同世代、崇神・日本武・竹内宿禰も孫の代となる。
- ②記紀系譜では、彦太忍信・家主忍男武雄心・竹内宿禰、景行・稲日太郎姫・日本武、磐余彦と仲哀・神功・応神の親子関係に多々矛盾が潜んでいる。天日槍と大己貴についても、年代的に途方もない隔たりがある。ところが本書の王系譜では、これが自然と消滅する。検証してみよう。
- 一、記紀での日本武と武内宿禰は、二、三代離れて二人以上も存在。↓本書では、単に一人。
- 「孝元紀」は彦太忍信命が竹内宿禰の祖父、「孝元記」は彦太忍信命が竹内宿禰の父と記す。
- 「景行紀」、「家主忍男武雄心命、紀直の遠祖菟道彦が女影媛を娶りて、竹内宿禰を生ましむ」
- 一、記紀の景行は、稲日太郎姫を妻に娶るが、系譜的には稲日太郎姫の三代後に誕生した。つまり孫以上の歳の差がある。仁徳・磐之媛の夫婦も然りだ。↓本書では、いずれの夫婦も適齢期。
- 一、鹿兒島神宮は、「八幡（応神）は石体宮で生まれた。当宮こそ八幡信仰の発祥地だ」と主張して一歩も譲らない。『水鏡』も『今昔物語集』も、神功がここで八幡を産んだ由を伝える。
- 一、記紀は、垂仁・景行は纏向に都して、その御世は四世紀初頭から中頃とされるが、纏向遺跡は四世紀初めに衰退に向かった。↓本書では、垂仁も景行も三世紀後半、即ち日本朝の天皇。
- 一、「垂仁紀」は、天日槍が垂仁期に襲来したとする。一方、『播磨国風土記』は、天日槍と神代に生きた大己貴（素戔嗚の児）が播磨で争ったと記す。↓本書では、共に三世紀前半の人物。
- 一、「記紀」では、神武から垂仁に至る間、百歳以上生きたとする天皇が目白押しに存在する。
- 神武が百三十七歳、大倭王八代の孝安は百二十三歳、孝霊は百六歳、崇神は百六十八歳、垂仁は百五十三歳とある。倭姫や武内宿禰に至っては、六百歳、三百歳の長寿とされた。↓本書では、神武、孝安・孝霊、崇神・垂仁、倭姫、武内宿禰の寿命は、いずれも高々六十〜八十余歳。